

清流

教師を評価するのは…

今年も神奈川県から一通の年賀状が届きました。教え子からの年賀状です。その教え子は、私が初任地で担任した子どもなのです。ですから、「子ども」というのは失礼で、年齢はもう40歳半ばを過ぎていてでしょう。私の記憶では、担任をしたときから、一度も欠かさず年賀状を送ってくれているのです。実は、少し手がかかった子どもでしたので、元気で頑張っていることが分かり、毎年とても嬉しい気持ちになります。

ところで、「教師の評価は、いつ、誰が、どのように決めるのでしょうか。」…我々教師の世界にも給与に反映する形での評価が導入されます。

学力調査の結果が良かったら、それを教えた教師や学校は良い評価になるのでしょうか。短期間で達成できるような目標を達成できたら高い評価を受けるのでしょうか。右肩上がりの結果を出した教師だけが良いのでしょうか。

学力や子どもたちの様子について、右肩上がりの結果を短期間で残すことができれば、それが高い評価に結びつくことについて異論はありません。しかし、子どもたちを育てるといふこと、「義務教育を行う」といふことは、いつもそんなに順調に進むわけではありません。一朝一夕に成果は出ないと分かっている、今は遠回りになると分かっている、長い長い視野をもって子どもたちを育てる、見守ることが必要な場合もあるのです。そのような私たちの営みを、いつ、誰が、どのように評価するのでしょうか

先日、ある研修会で教育哲学の専門家からお話を伺う機会がありました。
「そもそも教育と何か？」という問いに対して、その方が示されたのは次のような言葉でした。

すべての子どもたちが、自由の相互承認の感度を育むことを土台に、
自由に生きられる力を育むこと

哲学の専門家ですので、難しい言葉が並び、具体的な内容をイメージすることが私には難しかったです。しかしこの言葉の中に、「学力」という言葉は入っていませんし、結びは「自由に生きられる力を育むこと」なのです。この紙面で触れる余裕はありませんが、この言葉の内容については色々学ぶことができました。常に目の前のことに追われている状況の中で、この学びは大変貴重なものになりました。

「今教えなければいけないことを確実に定着させる」…このことは、教育者としてとても重要なことです。しかし、それとともに、「大人になる子どもたちの姿をイメージしながら、現状が良好な状態ではないとしても、あわてずじっくりと子どもたちと向き合うこと」そのことも大切にしていきたいと思えた内容でした。

このように考えると、教師の本当の評価は、大人になった子どもたちが返してくれるのではないかと感じています。例えば、同窓会や結婚式に呼んでくれること、そしてそこで話してくれる内容。そんな場面はないにしても、何らかの機会に感謝の気持ちを聞くことができること。そして、私の場合、前述のような年賀状を出してくれる教え子がいること。

そんなことが、私たち教師に対する本当の評価なのではないか、などと考えているところです